

諸石 皓子 85

手鏡

86回目の誕生日。亡父と同じ日である。その朝、「今夜はお祝い」と出勤した父が、予定日より2カ月も早いのに産まれたと呼び戻されたと聞く。大人の片手に乗る未熟児。当時、保育器はなく、柳ごうりに真綿を敷いた中で冬を越したらしい。次々と5人の弟妹が生まれ、私の中には勉強したいのに忙しかった記憶しかないが、手をかけかわいがられたらしい。腸が弱く、電報で毎度取り寄せた遠方の医師の処方薬で命拾いしたとか。新婚時に借りていた家の母屋のもらい風呂に、入浴の都度大便を浮かし、あわててくみ捨てた、と。



「島義勇像」を見て

北海道札幌市 望田 武司 76

先月、ご縁があつて、佐賀七賢人の一人で札幌の開祖・島義勇について話をする機会を与えられ、初めて島の故郷佐賀を訪れた。コロナ禍の中で関係者に迷惑をかけてはいけないと、2週間前から完全な巣こもり生活をしての訪問であつた。

天皇や鍋島公の期待を一身に背負つて未開の大地に臨んだ島義勇が、「3カ月でクビになつて、なぜ出世したの?」「金遣いが荒いという開拓長官の解職理由は本当なの?」ということを史実に基づき語り、北海道開拓の礎を作る人生大一番の仕事がとん挫した島の胸中に思いを寄せた話をさせていただいた。フロアから多くの質問もあり、関心の高さがうかがえた。

志半ばで札幌を離れた島義勇ではあるが、札幌には島の銅像が2カ所にある。二つとも銅像があるのはクラーク博士だけだ。初代の札幌判官であつた島義勇は、在任期間わずか3カ月とはいへ、「判官さま」と呼ばれて札幌市民に敬愛されている。

2年前、佐賀城公園の一角に島義勇の銅像が建てられたという。早速、足を運んだ。そこには九州佐賀から勇躍北海道に向かう島義勇の雄姿が

あつた。路上の信号機は「島義勇像前」と記されていた。知名度が高くなるに違いないと思つた。

また、銅像の傍らに「エゾヤマザクラ」が1本植えられているのに気づき、はつと思つた。島義勇の非業の死を遠く離れた札幌で知つた入植者の一人が「あんな立派な判官さまが」と嘆き、郊外からエゾヤマザクラ150本を掘り出し、島が作つた北海道神宮に献木した。

本殿に通じる玉砂利の両脇に植えられた献木は、今日の北海道神宮とそれに隣接する円山公園が北海道一番のサクラの名所となる、端緒とな

光を観に行く

わかもの

なぜ、長崎は楽しい。修学旅行で泊まった長崎のホテルで、夜景を眺めながらこう疑問に思つた。

そんなことを考えているときに頭に浮かんできたのがこの言葉、「観光とは『光を観に行く』ことです。つまり、その地域の人は何より元氣

つた。

なかなか気の利いた関係者がいるものだと思つた。まだ幼木である。北国の木が西国でうまく育つかなと気になつたが、春になると、きつと島義勇に「札幌で供養している花だよ」と、寄り添ってくれることだろう。(ノンフィクションライター)

柿の木の生命力

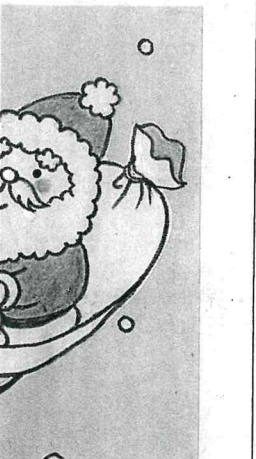
鹿島市 浜田 良秋 83

畑の隅に、1本の柿の木がある。10年以上前、周りのミカン畑の邪魔になるといふので、根元から2杯ばかり残して切つてもらつた。

その切り口から新しい5本の枝が出てぐんぐん伸び、一番高いのは3杯ほどにもなつている。親の木は老化して半分空洞になつている。そこ

鳥栖小6年 前間 太樹

で、この人の本の中で出合った。その本を初めて読んだのは4年生のときで、最初は意味が分からなかつたが、修学旅行というかたちでこの言



は 緑 の 公 の 上 に 葉 を 落 した。 葉の 光を 観に 行く。 長崎は 楽しい。 修学旅行で 泊まった 長崎の ホテルで、 夜景を 眺めながら 疑問に 思つた。 そんなことを 考えている ときに 頭に 浮かんで きたのが この言葉、 「観光とは 『光を 観に行く』 ことです。 つまり、 その地域の人 は何より 元氣